

承継 Project

今回ご紹介させて頂くのは、四国統括高知本部の小野山敬一さんと、その息子・栄太郎さん、この親子の「承継」である。SPC四国を創り上げて来た父の背中を見て、息子はどのように育ったのか。彼らのここまでの道のりをご紹介させて頂こう。

敬一氏の道のり

敬一さんは1938年に理容室を営む父母のもとに生まれ、中学卒業後は父の跡を継ぐ為、養成学校とインターンを経て理容師の資格を取り、18歳の時に上京した。

3年半の修行後、22歳という若さで地元高知に理容室の1号店を開業。その後は高知県青年理容師会に入り、地元青年会の会長となつて、2000人規模の成人式を執り仕切ったり、地域のボランティアとして児童施設や老人ホーム、病院などにカットを提供するなど、20代は青年会を中心に幅広く活躍した。

30代になつてからは青年会を卒業し、「おしゃれチーン男爵」に加入した。当時「男爵」と言えば、男性からすればそこに行くのがステータスともされた高級

パーバーで、大阪、東京、福岡などに展開しており、高知には17店舗があった。彼はチーンの求人や保険、経営計画などを司る部署の代表を3期務めた。時代の変化の中、「男爵」は美容チーン化していった。彼は美容室の店舗を増やし、自社の企業化を進めた。

また、結婚をして2人の息子が誕生した。このアクティブな活動の裏には、妻の支え無くしては成り立たなかったという。「自分は組織を作る。家内はそこに魂を入れる。箱は作るけど、中身をこさえるのは家内。自社全体のお母さんとして、教育などを徹底してやつて来てくれました」と彼は語る。

こうして夫婦二人三脚で自社を成長させ、1995年にはチーンを脱退し、全ての店舗を現在の名前に変更した。SPCに出逢つたのはその翌年の事で、彼が58歳の時だった。坂本室員と藤井室員が訪ねて来て、「全国の情報も知る事ができるし、これはいい！」とすぐに入会を決めた。入会当時は6店舗にまで自社が成長していたが、彼は現状に満足せず、さらにその先を求めてSPCの組織活動に励んだのである。

SPC四国の立ち上げ

敬一氏はまずメディア会員として、大阪で行われる会議に2年間通つた。当時は大阪まで高速道路も無かつたので、移動は飛行機か電車か船しかなかった。彼は活動資金をなるべく抑える為に、夜中から朝にかけて船で移動し、泊まる場所もカプセルホテルで済ませた。カプセルホテルと言つても今のような形ではなく、金属ベッドで隣人とくつき合つて寝るような場所だった。またはサウナの休憩所で雑魚寝が基本で、まさに手弁当での活動だった。

大阪に通いながら拡大を行い、高知支部の立ち上げに尽力した。活動が実を結び、1998年、SPC四国が発足。坂本会長のもと、初代総務を任せられる。発会式には全国より200名あまりの会員が集結し、賑やかなセレモニーとなった。その後は四国統括本部第3代会長を拝命し、SPC四国をあたためて来た。

60歳も間近にして、「地元の名士」と言つても過言では無い経歴の持ち主の彼が、一体何故このように組織活動に励めたのか。「僕はね、人が好きなんです。勉強させて貰うのは勿論ですがね、仲間。全国に仲間ができる。これは、本当に大きな財産なんですよ」と、敬一氏は語る。

自社の背骨

敬一氏はいつでも、自分が世の中のお役に立てないか、誰かの為に何かできないか、そんな衝動で動いていた。また、若い頃から「組織活動」というものが身近にあり、社会貢献に対しても率先して行つて来た。そんな彼だからこそ、SPCの理念や基本軌道に共鳴するのには時間は掛からなかつた。

様々な経験から自社を確立して来た彼であるが、SPCには「形の無いもの」「目に見えないもの」をたくさん学ばせて頂いたと明言する。自社の在り方や経営指針の確認であったり、意識や考え方の幅を拡げて貰つたり、その恩恵は言葉では言い尽くせない。

彼は「社会奉仕」「人間形成」「社員」の幸せ「この3つを社訓にし、自社をさらに充実させていった。FC展開に社員寮の設立、オーナー制度、奨学金制度、様々なシステム化を行いつつ、技能五輪には連続して出場し、数々の賞を獲得。また、職業訓練校「トリックLBアカデミー」を開設して、人材育成にも励んだ。横山室長に背中を押されてNPOを立ち上げ、移動美容車を導入し、訪問福祉サービスも開始。その他にも、知的障害者の自立支援事務所を設立するなど、地域の貢献活動もしながら、現在ではネイル・ビューティーサロンやカフェ、雑貨店などの事業展開も行っている。

「SPCの仲間達に背中を押して

もらつて来たこと、自分を支えてくれた家族やスタッフ、地域の方々やお客様にも心から感謝しています。皆様の支えのおかげで、今が在る。自社の根底にある『理美容』で、恩返ししていきたいと思つて、NPO活動もしています。老人や病氣の方が、ただ髪が伸びたから切るのではなく、いくつになつても『キレイになる』ことを通して、その喜びをお互いのパワーにしていきたい」と敬一さんは語った。

彼の創り上げた会社には、「3方良し」という強靱な背骨がある。それは、お客様や地域の方々に良し、スタッフに良し、そして自分と家族に良し、というものである。この背骨こそ、SPCで得た最大の学びであり、まさに創設横山理事長の「三象三しん哲学」の在り方そのものである。

File.07 四国統括高知本部

小野山 敬一、栄太郎



父と、母が、創り上げて来たもの。

後継者

敬一氏の経営する(株)トーリは4年前、次男の栄太郎氏が38歳の時、正式に事業承継をした。栄太郎氏はもともと劇団志望で、数年前東京で演技を学んでいたそうだが、ある時敬一氏がその舞台を見に行き、「これでは食って行けないな」と美容経営の道に進めたのだそうだ。

栄太郎氏のSPCとの出会いは、新人研修などで少しずつ始まったが、しっかりと組織に触れた瞬間は10年前に高知で行われた全国大会だったそうだ。

丁度、SPC四国が10周年という節目で、その全国大会の実行委員長を父が背任しており、初の高知の地での全国大会という事もあって、その企画はかなり綿密に行われていた。

テーマを「地球環境保全」とし、会場には海や山の環境汚染を写真パネルで飾って訴えた。そして敬一氏の友人から、紙で出来た自然に還る風船を仕入れ、それを飛ばしながら「地球環境保全宣言」を行った。当時はまだまだSPCもマイナーだったが、県から協賛を受け、イベント当日には知事が挨拶に来たり、「よさこい」も導入。おもてなしを一番に考え、ホテルの料理ではなく地域の有名店の料理や地酒を揃え、鮎の解体ショーも行われた。

「未だにあの全国大会のおもてなしについてはお褒めのお言葉を頂きますね！当時はまだまだ

オブザーバーとしてお手伝いをするだけだったのですが、父が千人規模のイベントを仕切っているのを見て、とても誇らしかったです。正直、SPC讃歌やパンチにはひいていたのですが、パーティーの時に仲間と同じハッピを着てやり切った感のある父の笑顔を見て、格好良いな！と思いました」

栄太郎氏とSPC

敬一氏は息子に対し「SPCに入れ」とは言わず、「行ってみる？」という感じで、あくまで自主的に選択をさせたそうだ。栄太郎氏は少し戸惑いながらも、高知の全国大会から1年後、正式にSPC入会を果たした。

入会後のエピソードとして、栄太郎氏はこう語る。

「初めて競技会の実行委員長を任された時、かなりいっぱいいっぱいになってしまっただけで、二世という事もあって、会員さんから自分の名前を呼んで貰える事で、認められているような気がして嬉しくて。それを見て父も嬉しそうにしているから、少しは恩返しになっているのかな」

な？と感じています。僕に能力が無かったら、父も事業承継をしようとは思わなかったはず。本音の意味での事業承継を成す為にも、SPCは修行の場だと思っています。基本的に私は父の事が大好きで、誰よりも尊敬しているのですが、どうしても仕事に口出しされると、カチンと来てしまったり、小さな喧嘩をしてみよう。でも、SPCの先輩からも同じような事を言われて、親の言う事は正しかったんだと納得出来たり、他人から言われて初めて腑に落ちたり。いろんなオーナーさんと出会う事で、父の背中を客観的に追う事が出来て、期待に答えたいという気持ちも出て来ました。

べく自己成長できるところに連れてやりたいと思つて来た。自分の中でやりたい事や想いが強かったら、自由に育って欲しい。ただ、1つだけ言うとすれば、長年務めてくれた社員さんたちを大事にして欲しい。他には何も無い。人生って限られているでしょう。いつまでも自分は生きていないから、まずは自分を知って

『託す』。無の境地になるとするのは、なかなか難しい。子供がかわいいのには当たり前だからついでに、助けたくなるけれど、託せるかというのには自分の問題かな。独りよがりにならないようにしないと。

らないけれど、それでも仲間とは一生ずっと繋がっていくんだと思う。人生というのは、自分がどれだけ幸せだったか、死ぬ時に何人の人が涙を流してくれるか、それが自分の人生の価値だと思います。死ぬ時に貰う『通信簿』ですね。その時の為に、精一杯今を生きようと思う」

SPCには懐が深い人がたくさんいて、自分を父と同じ目線に育ててくれました。父が組織活動で培った仲間との信頼関係の中で、父への恩返しとして自分に返ってきていると感じています。最近ではNEXT50のメンバーなど、2世のネットワークも確立されつつあって、これも父が作ったコミュニティがあるからこそその輪で、深い恩恵を感じています」

承継

「私は『ああしろ』『こうしろ』と指図しないし、うるさく言わない。自分が濁ったらいけないし、濁った池に息子を入れない。なる



お父さん、大好き。

「父のDNAは僕に残っているから、逝く時も安心してくれ！と思つています。父の幸せな日々が僕の命の糧になって、その魂は脈々と受け継がれて行くから。自分の使命は事業拡大ではなく、父が創ったものを今の時代にどうフィットさせて行くか、という事です。今の子たちにも父の想いを共有していける為に、形を変化させる。そのやり方を考えるのが僕の仕事。方法はたくさんあっても、原理原則は変わらない。

僕も本当に父が大好きで、誰よりも尊敬しているし、誰よりも偉大だと思つています。人としても、男としても、経営者としても、誇りに思っています。父の事が好き過ぎて、本当に困っちゃうー」と熱く語った。

SPCは「後継者を育てる土壌」を彼らに与えた。父が育った場所で、息子もまた同じように育てられている。それはどこにも無い、「温もり」の地である。



株式会社 トーリ

〒781-8136
高知県 高知市一宮西町3-2-1
TEL 088-845-2202
H.P. <http://to-ri.jp>



高知で開催された2006年春季全国大会